多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

平成 22 年　9 月　26 日

派遣者氏名（専門分野）	■■■■■　（　英語学　）

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	英語の時間表現・準助動詞・比較構文に見られる認知システム

派遣期間

平成 22 年　2 月　12 日　～　平成 22 年　4 月　14 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	米国	カリフォルニア州	カリフォルニア大学バークレー校	Professor　Eve E. Sweetser
	米国	カリフォルニア州	スタンフォード大学	

派遣先で実施した研究内容

派遣先で実施した研究内容は以下の 6 点にまとめられる。

第 1 に、日本や大阪大学付属図書館で入手しにくい、研究関連資料の収集を行った。第 2 に、英語・他の言語の時間表現に見られるメタファーやメトニミーの研究を行った。具体的には、次の文に見られるように、同じ表現が使われているのに、メトニミー的に解釈される場合とメタファー的に解釈される場合がある表現の研究を行った。(1) a. Pat got to the well ahead of Kim.　b. The action signals a tougher stance against armed factions in Haiti ahead of fall elections…
(1a)はメトニミー的に解釈され、 (1b)はメタファーで説明される。まず、このような表現の収集を行い、メタファー・メトニミーのどちらに分類されるかを考察した。

第 3 に、第 2 に行った調査から、日本語では時間表現では、他の言語と比べメトニミーをあまり使用しない、という結果と、時間メタファーは、主体的・客体的把握の観点から分析することが有効であるという結論を得た。特に、時間メタファーを主体的・客体的把握と直示的・非直示的な観点で分類した方が多くの言語に見られる時間メタファーを統一的に説明することが可能となるのではないかと分析した。

第 4 に、第 3 で行った考察・分析を、派遣先の若手研究員・大学院生の前で発表し、議論した。その議論をもとに再度自分の考察・分析を検討した。

第 5 に、比較構文の研究では、先行研究で提出されている例文や自分で作成した例文の容認性を現地の人に判断してもらい、まとめた。また、複数の英語母国語話者の音声を録音し、その音声波形を調べた。結果は、必ずしも先行研究で提示されている容認性判断と一致するわけではなく、先行研究の分析と違いが生じた。結果をもとに、比較構文を焦点の観点から分析することを試みた。

第 6 に、英語の準助動詞 used to の研究を行った。その研究では、まず、共時的・通時的コーパスのデータを検証し、その使用状況を調査した。結果は、used to は、一人称主語と生起しやすく、動詞の種類には影響を受けない、というものであった。また、コーパスを調査した結果を統計的に分析した。この点に関して、受入研究者の助言を得た。

準助動詞 used to の研究では主に 2 つの点から考察を行った。1 点目はそのアスペクト性である。従来、used to は習慣性を表すという研究がなされてきた。本研究では、状態性と習慣性に注目し、その両者に共通する「同一性」という観点から分析することを提案した。その過程において、used to を期間を表すマーカーとして分析することを提示した。そうすることにより used to が関わる一連の現象を統一的に説明することができることを示した。もう一つの点は、used to の口語で使用される新規の用法である。それは used to be という表現が文頭で用いられ、副詞の formerly や once に類似した意味で用いられる用法である。これは、厳密には規範文法的としては誤った用い方であるが、この表現の使用が近年増加しているようである。このことを証明するために、まず現代英語のコーパスを用い、その使用状況を調査した。次に、どのようにこの新規の用法が発達したかを考察した。研究では、それには「使用頻度」、「便利さ」、「他の表現との関連性」が関わっているという提案を行った。「使用頻度」とは、ここでは be という単語は基礎的な単語であるので使用頻度が高く、使用頻度か高い表現は定着しやすい、という分析に基づいている。「便利さ」とは、used to は「過去においては習慣的に行っていたが、現在は行っていない」ということを一語で含意できるため頻繁に用いられたのではないか、という考察である。「他の表現との関連性」というのは、副詞 maybe の発達過程と類似の観点から捉えられるというものである。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

本研究目的は次の 8 つであった。第 1 に、英語や他の言語の特定の構文、特に時間表現に見られるメタファーやメトニミーに注目し、日本語との類似点・相違点を明らかにする。第 2 に、第 1 の目的達成のために、派遣先の大学に所蔵されている最新の、膨大な文献を調査する。第 3 に、英語のいわゆる準助動詞と比較構文に焦点を当て、その特徴を記述し、それらを統一的なメカニズムで説明できるようにする。それらのトピックに対しても、派遣先の大学に所蔵されている、日本では手に入らない文献を調査する。第 5 に、比較構文に対しては、複数の英語母国語話者の音声を録音し、その音声波形を調べる。第 6 に、英語の準助動詞に関しては、共時的・通時的コーパスのデータを検証し、その使用状況（例えば、一人称主語と生起しやすいのか、活動動詞と生起しやすいのかなど）を明らかにする。第 7 に、派遣先の大学に在籍する当該の分野で活発に研究を行っている研究者と意見を交換し、議論する。そして最後に、派遣先に在籍する大学院生と活発に議論し、今後もお互いの研究を深めるための交流の足がかりとする。研究おいては、結論をすべて最後まで明示的に示すことができたわけではなかったが、次の点を明らかにすることができた。1. 時間表現に関して、日本語は他の言語よりもメトニミーを使用しない。2. 比較構文に関しては、先行研究で示されている以上に容認性の度合いに個人差があることがわかった。3. 準助動詞の研究においては、主に口語で使用される新規の表現を発見することができた。

派遣後の研究発表の予定

Journal of Pragmatics という国際誌に投稿中。